

## ●ベテラン工場長から告げられたこと

ラティスが市場に評価され数字が伸びてきたときである。ある夜遅く、工場長が事務所に入ってきた。私が生まれる前からこの会社にいる人で、現場の最高責任者である。

父と私の前で、彼はいきなり土下座をした。そして言った。「会社、辞めさせてくれ」

私達は驚いた。

彼は純粋な組子職人である。

良い組子物——組子欄間、組子障子だけを作りたいというのだ。

ただ、それだけである。

市場から和風商材がどんどん消えているのは事実だった。そこで代わりに洋風商材を開発した。

父は職人といえども経営者である。心の底では組子欄間を作りたいと思っっているはずだが、働いている職人達の「雇用」「生活」を最優先に考える。

和風の商材から洋風の商材に変えることも、職人を守るために仕方ないことだと知っている。

しかし、働いている人はそう思わないようだった。

——ラティス？ そんなカタカナのものは組子でも何でもない。

若い息子のやることはわからない。

組子職人の出番ではない。

給料も上がりそうにない。

タニハタに未来はない。

もう、ここにいない必要はない、と。

私が逆の立場だったら、同じように考えたかもしれない。

優れた職人は最高の技術、難しい仕事を常に目指す。そういう職人だからこそ苦しいことにも耐えてきたのだ。

組子職人は「天から与えられた仕事」だ。海外から来た製品（ラティス）では天を目指しようがないのだ。

私は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。職人の雇用を守るための決断が、逆の結果を招いてしまったことに。

この人とは小さい頃からたくさんの思い出があり、恩がある。まさに家族同然の人である。

父は、職人とその家族を守ろうとする職人であった。  
工場長は、職人としての意地を通そうとする職人であった。

——職人とは何だろうか。

——どちらが正解なのだろうか。  
わからなかった。

ラテイスを開発する時点で職人達とはよく話し合ったつもりでいた。しかし、数日の議論で解決できるほど簡単な問題ではなかったのだ。

「和風の組子製品がなくなったわけではないし、まだまだ出番はある」と、父と二人で論じたが、やはり、工場長は会社を辞めるといふ。

会社の前で工場長を見送った。

「仕方ないちゃ…」

父はそう一言だけつぶやいた。

## ●上げ潮・下げ潮

人は上げ潮、下げ潮に巻き込まれているとき、その状態が永遠に続くかのような感覚に陥る。バブル経済のときは、上げ潮がずっと続くような、また、景気が悪いときは下げ潮がずっと続くような気がする。

1999年、タニハタを猛烈な上げ潮と下げ潮が襲った。

「組子のラテイス」はすこぶる評判が良かった。ゲーディングブームということもあったが、「比較的低価格で勝負したこと」と「室内でも使用できる品質を確保したこと」で受注数量が伸びた。

大量注文もいただけた。体制が十分でなくとも「できません」とお断りする訳にはいかない。断ったら後がない…。職人達は必死に入ってきた注文をこなした。しかし大きな注文が重なる、展示会めぐりで得たお客様に対する前向きな気持ちも薄れ、仕事も粗くなりやすい。細かいことが大事な仕事なのに、細かいことがおろそかになりがちだった。

一方で従来の組子欄間、和風建具の注文は激減した。

中心的な取引先であった富山県内の建具店では、職人の高齢化、和風建築の減少、和室離れ、住宅着工数の減少と、マイナス要素が一気に吹き出したのだ。

こうなると、ラテイス大量生産へのシフトは当然の流れに思えた。工場長の思いもわかるし、組子欄間も無くしたくない。葛藤は消えないが考えを決めなければならなかった。

——組子欄間はもう日本人が見捨てた商品だ。こんなのもなくても私達の生活には影響ないよ。

組子の柄は縁起がいい？

良い材料を選別して使っている？

心を込めた商品づくり？

それがどうした。

恰好いいこと言っているんじゃない。注文がなければ、売上がなければ意味がないじゃないか？

倒産しては何にもならない。このまま何も手を打たないと組子欄間とともにタニハタは消えてしまう。

古くさい考えも伝統もすべて切り捨ててしまえ！

多くの注文をこなすために第二工場の敷地内に新工場を増築した。土地も少し買足した。

ラテイスは上り坂である。注文は入ってくる。この状態は私がある限り、ずっと続く——私は自分に都合のいいように未来を見通した。

富山県のお墨付きを得たのがきっかけで、銀行からは長期で低利の融資が受けられた。

ラテイス量産用の機械も購入し、試作のための補助金もいただいた。人も雇い入れ、古い工場部分の内装も貼り替え、すべてを一新した。

自分はまもなく社長になる。経営は数字である。損するか得するかである。

生き残らなくては意味がない。和風の組子欄間はなくなるが、姿を変えて洋風なインテリア商材として「組子」は生き残る。現代の生活にあった新しい製品になり生き残ってみせる。

何度も何度も、自分に言い聞かせた。